

# 活動報告書

その1

報告者氏名：大門泰士

所属：富山県立富山高等支援学校

記録日：2014年2月28日

## 【対象児（群）の情報】

・ 学年

高等部1年

・ 障害名

知的障害

・ 障害と困難の内容

書字活動に対する苦手意識が強く、集中力が途切れやすい。姿勢がすぐに崩れたり、居眠りをしたりすることがある。

## 【活動目的】

・ 当初のねらい

卒業後は企業就労を希望しており、会社との連絡手段として日報を書くことも考えられるため、学級の宿題として日記を書くことを課している。日常会話が成立し、その日の出来事も振り返って話すことができるが、日記として書いてくることができなかった。

漢字をあまり覚えていなかったり、字を書くことそのものに苦手意識があったりすると想定し、iPadを利用して日記を書くことにした。

アプリは「DRAGON Dictation」を使用。音声、キーボードどちらの入力にも対応できるようにした。

・ 実施期間

5月から7月

・ 実施者

大門泰士

・ 実施者と対象児の関係

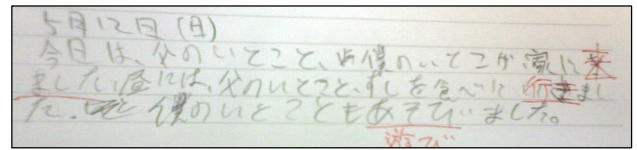
担任

## 【活動内容と対象児（群）の変化】

### ・対象児（群）の事前の状況

ノートを用いた日記の宿題は、「忘れていた」と言ってやらなかったり、「今日は〇〇をしました。おもしろかったです。」という簡素な内容だったりすることが多かった。忘れてきた際には学校で書くようにした。しかし、なかなか手が進まず、規定量の5行を書くのに20分以上かかることもあった。

普段の学習ノートでは、誤字が多く、赤で直されたノートを返されるとげんなりする表情がよく見られた。黒板に答えを書く活動などで手が止まることが多く、間違いを訂正されるたびにふてくされることもあった。しかし、漢字で書かなくてもよい時や、答えに自信がある時などは意欲的に活動に取り組むことが多かったことから、漢字を覚えていないことが書字活動への苦手意識を高めていると考えられた。



5月12日(月)

今日は父のいとこと、僕のいとこが家にきました。昼には、父のいとこと、すしを食べにいきました。僕のいとこもあそびました。(原文ママ)

### ・活動の具体的内容

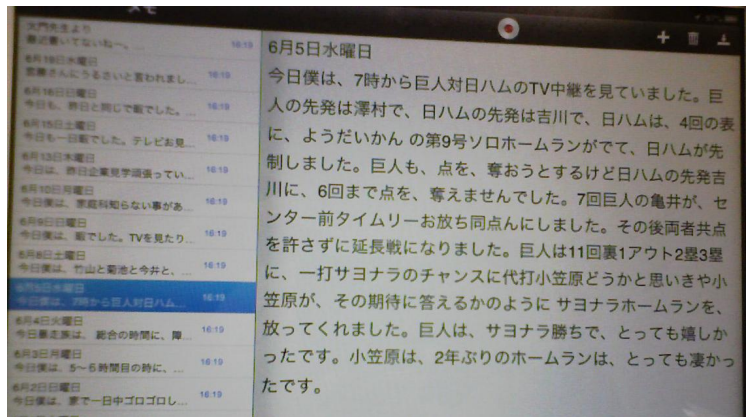
iPadを本人に持ち帰らせ、家庭で日記を書く際にiPadのアプリ「DRAGON Dictation」を使用するようにした。日記に対する担任からの返事も追記する形式で行った。

### ・対象児（群）の事後の変化

はじめは興味本位という感じで、楽しみながら取り組むことができた。話したことが文字となって記録されていくことがおもしろかったらしく、初日から5行を達成することができた。

内容もより詳しく、中身のあるものを書くことができるようになっていった。

その後、2週間ほどで音声入力よりもキーボード入力がスムーズに入力でき、自分に合っていると判断したようで、以降キーボード入力での日記が続いている。



6月5日水曜日

今日僕は、7時から巨人対日ハムのTV中継を見ていました。巨人の先発は澤村で、日ハムの先発は吉川で、日ハムは、4回の表に、ようだいかんの第9号ソロホームランがでて、日ハムが先制しました。巨人も、点を、奪おうとするけど日ハムの先発吉川に、6回まで点を、奪えませんでした。7回巨人の亀井がセンター前タイムリーお放ち同点んにしました。その後両者共点を許さずに延長戦になりました。巨人は11回裏1アウト2塁3塁に、一打サヨナラのチャンスに代打小笠原どうかと思いきや小笠原が、その期待に答えるかのようにサヨナラホームランを、放ってくれました。巨人は、サヨナラ勝ちで、とっても嬉しかったです。小笠原は、2年ぶりのホームランは、とっても凄かったです。(原文ママ)

## 【報告者の気づきとエビデンス】

主観的気づき	気づきに関するエビデンス
日記の文字数が増えた。	ノート利用時は平均 57 文字（最小 23 文字、最大 63 文字）だったが、iPad 利用時は平均 131 文字（最小 100 文字、最大 315 文字）となった。
漢字の使用が増えた。	漢字変換が可能なため、漢字の使用が格段に増えた。 小学校高学年程度を基準として漢字利用頻度を比較した結果、ノート利用時は、毎日 3～7 文字の訂正箇所があったが、iPad 利用時は毎日 0～2 文字の訂正にとどまった。
誤字の割合はあまり変わらなかった。	音声入力の読み込みミスやキーボードの入力ミスがあったとしても、そのままにしていることが多かった。 ノート利用時は毎日 0～3 箇所の誤字が見られたが、iPad 利用時も毎日 0～2 カ所の誤字があった。

## 【その他エピソード】

普段から自分のスマホを活用しており、ICT 機器を使うことへの抵抗はほとんどなかった。iPad を使用することを伝えた瞬間の表情が良く、「つかみ」が良かったため、課題への取り組みもスムーズにスタートできたと思われる。

当初は音声での入力を想定していたが、キーボード入力にも対応していることに自ら気付くと、自分に合った方法に変えていった。やり方を自分で工夫し、やりやすいように変えていくことで、自主的に取り組む姿が見られた。

## 【今後の見通し】

文章作成における書字活動の代替手段としての活用は十分な成果が見られたが、継続して取り組むためには本人が意欲を持続できるための支援も必要である様に感じている。できたことが賞賛されたり、日記が日々の振り返り活動に役立つことが分かったりするなど、本人にとって有用であることを伝えていきたい。ICT 機器に頼るだけでなく、活用しながらも障害特性や実態に応じた支援を行うことで、本人にとってよりよい学習を進められるようにしていきたいと考える。

今後は就業体験での日誌記入や、報告書の作成など、様々な場面でも ICT 機器を活用した文字入力の機会を設定していきたい。iPad があれば自分でも文章が書けるという経験を繰り返すことで、自信をもって書字活動に取り組めるようになってほしいと考える。

また、今回の取り組みでは、音声入力で始めたが自分なりにキーボード入力が向いていると判断し、入力方法を変更したという場面が見られた。このことに注目すると、自分なりにアレンジしたり、工夫したりして使うようにするとより関心が高まり、意欲的な活用につながるのではないと思われる。卒業後を見据えた将来的な ICT の活用の観点からも、生徒が自分なりに使いやすいように工夫するための支援と共に考えていきたいと思う。

## 【対象児（群）の情報】

## ・ 学年

高等部 1 年

## ・ 障害名

知的障害

## ・ 障害と困難の内容

作業学習の工程を全て覚えることが困難で、教師にその都度確認しながら取り組む必要がある。手順表があれば一人で進めることができるが、手順表に掲載する情報量が多いと混乱してしまうことがある。

## 【活動目的】

## ・ 当初のねらい

作業学習（木材加工班）でコースターの製作を行っている。完成までには5つの工程（製材、穴開け、はりつけ、成形、塗装）を要し、それぞれの工程で詳細な手順が決められている。

障害の特性から、たくさんの工程を一度に覚えることは難しい。繰り返して取り組むことで徐々に覚えることができ、一人でできるようになる。しかし、複数の教員が関わる学習環境のため、道具の持ち方や仕上がり具合（検品の合格基準）などに微妙なばらつきが生じてしまっていた。担当する教師が変わると、卓上ボール盤のレバーを操作するスピードが微妙に違っていたり、ボンドをつける量がちょっと少なかったりするなど、微妙な指導のぶれが生じていた。生徒は以前指導されたこととは異なるために、理解する上で混乱が生じてしまうことが見られた。手順表を用いることで指導のぶれは解消されるが、作業内容が詳しくなると手順表の情報量が多くなり、混乱しやすくなってしまった。

そこで、作業工程についての示範を動画で撮影することにした。iPadで閲覧できるようにすることで、作業学習中も容易に確認できるのではないかと考えた。



## ・ 実施期間

9月から現在

## ・ 実施者

大門泰士

## ・ 実施者と対象児の関係

作業学習担当者

## 【活動内容と対象児（群）の変化】

### ・対象児（群）の事前の状況

示範を見ながら作業の工程を確認するようにはしていたが、内容が多く一度には覚えられない。実際に取り組むと、何度も手が止まったり、指導者に質問したりする。

製作する製品数が多いため、何度も繰り返し取り組むことになるので、それぞれの工程の細かな部分も徐々に身に付けることができた。しかし、一人でできるようになるには、2ヶ月程度の期間を要した。（週に1日、6校時の取り組み。）

### ・活動の具体的内容

示範の動画を作成し、作業を行う前に動画を確認してから取り組むようにした。また、作業手順が分からなくなったら、まずは動画で確認し、それでも分からない場合は指導者に質問することとした。

iPadでいつでも閲覧できるようにYoutubeに公開し、アプリの機能でiPadにダウンロードすることで、通信速度に関係なくスムーズに動画を再生することができるようにした。

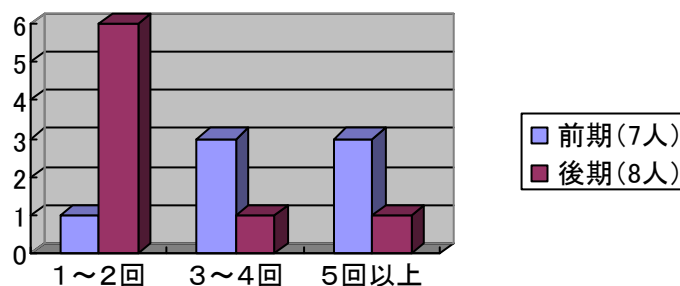


iPadで動画を見ながら塗装している0さん

### 動画作成時に気を付けたこと

- ・動画は気軽に見られて、集中力を切らさないように、1分程度の長さとする。
- ・実際の作業をイメージしやすいように、主な視点は作業者からとする。
- ・教師が示範を行った。
- ・材料を固定する向きや、機械を動かす速度などポイントとなるところでは、字幕を入れたり、静止面にしたりするなどして、分かりやすいものとする。

### 一人でできるようになるまでの授業回数

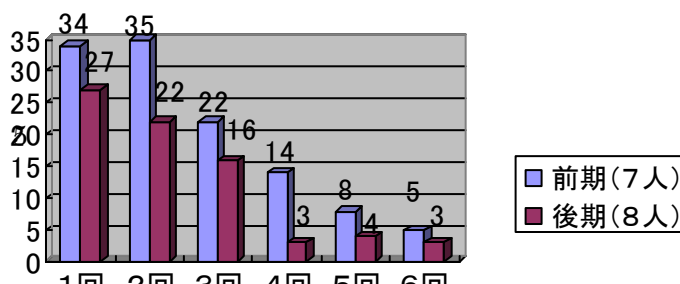


### ・対象児（群）の事後の変化

本校の作業学習は10月を境にメンバーが入れ替わる。iPadを用いた指導は後期の生徒達に行った。iPadを使用しなかった前期の生徒との比較検証を行った。

個々の能力の差はあるものの、ほとんど全ての生徒が3回以内の授業で、一人でできるようになった。また、製品の仕上がり具合をみても、報告後のやり直し回数が減り、精度の高いものができるようになってきている。

### 報告後のやり直し件数



## 【報告者の気づきとエビデンス】

主観的気づき	気づきに関するエビデンス
一人でできるようになるまでの授業回数が減った。	iPad を使用した生徒たちも使用しなかった生徒たちも、早い生徒で2回目までには一人でできるようになり、遅い生徒では5回目の授業で一人でできるようになった。しかし、iPad を使用した生徒たちの方が全体的に少ない授業回数で一人でできるようになった。(上記グラフ参照)
製品の仕上がり具合(精度)が高まった。	担当する工程が終わった時点で指導者に報告を行うことになっているが、失敗していたり、仕上がり具合が不十分だった場合にはやり直しをすることになる。その回数(個数)を比較すると、iPad を使用した生徒たちの方がやり直しの回数が少なくなった。

## 【その他のエピソード】

分からないことがあれば質問するように指導していても、分からないことを恥ずかしいと感じる生徒もいる。注意されるのが嫌で質問しづらいつ感じているため、iPad で動画を確認すれば質問しなくてもいいというだけでも意欲的に取り組めることにつながった。自分で解決できる喜びを実感することができたのではないかな。

また、指導者が仕上がり具合を確認する際に、「もうちょっとゆっくりと」というような、あいまいな指示が出なくなった。動画を見て同じようにするように伝えることで、指示の統一が図られた。このことは、次年度以降、指導者が変わったとしても同様の授業を展開しやすくなることにもつながる。

授業を進める中で、編集された動画に興味を示し、自分で作りたいと言う生徒もいた。作業学習に限らず、生徒がやり方を覚える際に必要な動画を自分で作れるようになるなど、自分で工夫しながら ICT 機器を使うことができるかと将来的にも活用が広がる。

## 【今後の見通し】

支援ツールとして活用することは、その効果からも有効であった。「分からないことは質問する」という指導をよく行っており、そのスキルは社会に出てからも必要であることに違いはない。しかし、「分からないことがないようにあらかじめ配慮する」や「分からないことは自分で分かるようになる」といった指導も同様に重要視していきたい。

また、今回の取り組みでは、自分で動画を作りたいとの生徒からの声が聞かれた。動画編集に関する興味があることからの発言かもしれないが、「自分のための支援ツールを自分で作ること」につなげて指導することも視野に入れていきたいと考える。

## まとめ

今回の2つの実践からは、「書字活動への苦手意識を減らすこと」「分からなくなった時に自分で解決すること」など、それぞれに一定の効果が得られたことは嬉しく感じている。

はじめの実践では、想定していた音声入力だけにとどまらず、自らキーボード入力を選択して使いやすいように工夫していたこと、後の実践では、示範の動画を自分で作成するなど工夫することで、他のことにも動画が使えるということ、これらの「生徒が自分で工夫してさらに発展させる」ことに関して、与えられたことだけに取り組むのではなく、生徒が自ら進めていこうとした時により成長を感じられたことに今後注目していきたい。

自分に必要な支援を、自分で工夫することができるようになれば、卒業後の生活もより発展的に向上することが期待できると考える。